

 書評

 神庭重信, 松下正明 責任編集
 専門医のための精神科臨床リュミエール 30
精神医学の思想

西園昌久

本書の「序」によると、日々新たに加わる精神医学上の課題の解決の方向を照らしだす光(フランス語:リュミエール)の役割を果たすことを目的に刊行されてきた本シリーズも一旦、本書をもって休止されるという。従って本書はいわば、これまでの本シリーズの総括書である。題して、『精神医学の思想』。評者のような年輩の者ならずとも、日々のおのれの臨床の所為にいささかな思いをしている精神科医は手にしたいネーミングの本である。というのも精神医学は人間存在、そして社会のあいまいさ、不確かさに対応せねばならない。つまり、精神科医は本来、「考える人」であることを求められるのである。それに応ずるかのように、本書の「序」で2人の編者は連名で、“そもそも精神の自由とはどういう状態なのか、そして究極的には、人であるとはどういうことなのかなどの疑問を抱きながら、精神医学は精神を病む人びとと向きあうことになる”と記している。その謙虚さこそ精神医学を成り立たせるものであろうし、本書編集の基本的態度であろうと読みとれる。

本書は6章21項目からなる構成である。それを紹介することは指定された字数を超えるためできないが、よくもまあこれだけのテーマを用意され、しかもそれにふさわしい執筆者を集められたものと思う。大学を辞めて10数年経つ評者には執筆者の多くの方は未知の人であるが、それぞれの内容はそれぞれの専門の立場から本書の『精神医学の思想』の趣旨にそった論述をされ、徒らに自己の立場に拘わるという論文は見あたらない。その意味で、精神医学とその関連領域の最近の進歩を安心して学ぶ格好の教材である。わが国の精神医学研究陣の健在さとその可能性をあらためて実感することができた。

第1章には「精神医学とは何か」と題して本書の基調をなす内容が明らかにされている。その中で、精神医学は、「精神疾患に病む人の人間理解」

として、脳疾患の次元からみた理解、気質・体質、パーソナリティの次元から見た理解、現象学的次元から見た理解、人間学的次元からみた理解、社会・環境の次元からみた理解よりなる「5次元的精神医学」が解説されている。DSM-Ⅲがあらわれる前までに精神科医に育った人たちには、その一部をあげれば懐かしいKraepelin, Jaspers, Schneider, Kretschmer, Rümke, Minkowski, von Gebsattel, Binswangerなどの精神科医の名前が陸続と登場しその学説が病む人の人間理解という視点から解説されている。「人間学的次元からみた理解」の中で、はじめFreudの影響を受け、後にそこから離れて独自の現存在分析を創始したBinswangerの解説に著者の思いがこもっているように見受けられる。そのBinswangerは、彼自身の著書の中で、“聴くこと、それは精神医学における鍵技能である。Freudの影響が及ぶ前は、精神科問診は衣服やシャツの上から打聴診するに等しく、患者の本質的なことは取り残され確かめられないままであった”と記していることを紹介しておきたい。DSM-Ⅲ以降の精神科診断に対するある種の閉塞感もBinswangerの戒めに従えば時代的逆行と云えよう。『精神医学の思想』を語る時、更に論じていただきたいことは、人類社会の発展の折々の時代精神の変化が疾病構造とそれに対応する精神医学の内容に与えている影響についてである。そして、社会精神医学の理念と関連した精神科チーム医療も大切なテーマと思う。ともあれ、精神科医の必読の本である。日本精神神経学会学術総会などで論じあうのに最適のテキストである。

(心理社会的精神医学研究所)

●B5 304頁 2012 定価8,400円(本体8,000円+税) 中山書店